

研究主題 高等学校における OJT の進め方に関する研究

－教員の授業力向上を目指した取組を通して－

【研究担当者】 鈴木 尚 鈴木 裕 山崎 健志
千葉 賢一 千葉 重徳 松本 諭
上田 淳悟 畠山 隆行

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2735 FAX 0198-27-3562

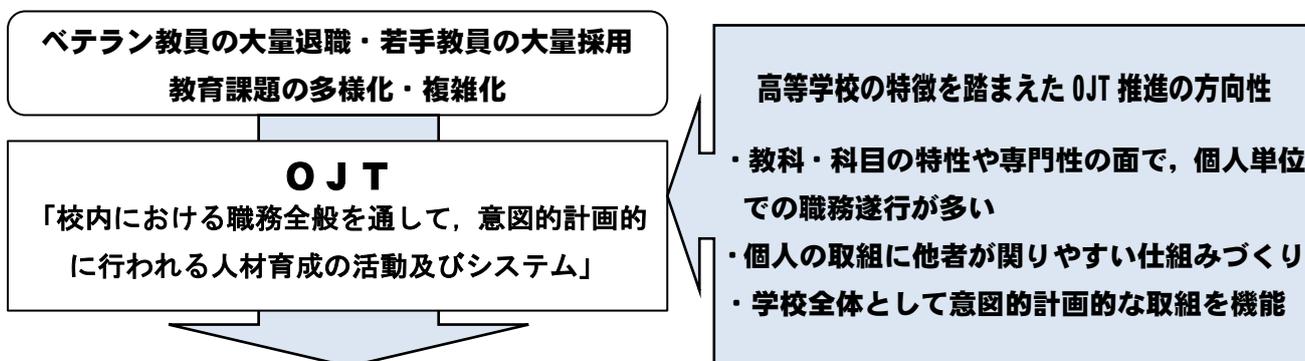
E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

はじめに

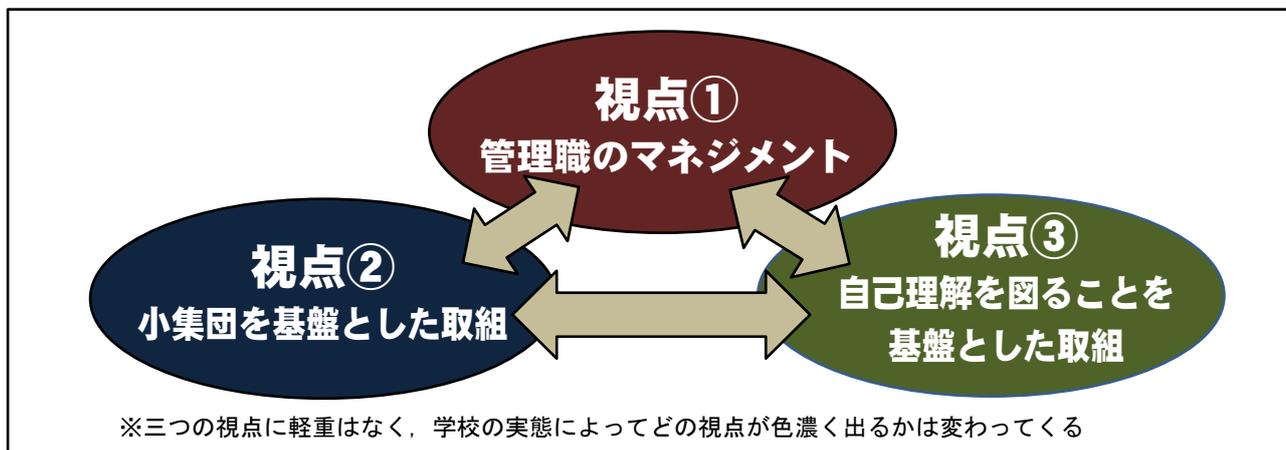
この研究は、高等学校における授業力向上を目指した取組を通して、校内での人材育成を図るシステムの構築をどのように進めればよいのかという内容です。そして、高等学校の現場に即した具体的な進め方を「高等学校 OJT 推進者のための授業力向上ガイドブック」にまとめ、各校の OJT 推進者が使いやすいように工夫しました。

なお、研究報告書およびガイドブックは、岩手県立総合教育センター Web ページ「教育研究データベース」からダウンロードできます。→ <http://www.iwate-ed.jp/db/db1/index.html>

高等学校における OJT 推進のための三つの視点



高等学校の特徴を踏まえた OJT 推進の方向性を考慮し、三つの視点として、以下のようにまとめました。



【図 1】 高等学校における OJT 推進のための三つの視点

三つの視点

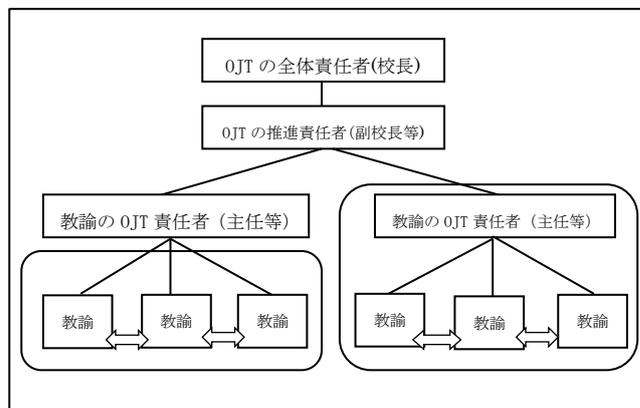
視点① 管理職のマネジメント

校内組織や校内体制を考える際、新たな取組として新たな組織・体制をつくろうとすると、負担感が増します。そこで、既存の組織・体制を活用し、それをOJTの組織としても機能させると有効です。

(詳細は研究報告書 pp. 4-7 参照)

《管理職に期待される取組》

- ☆ 人材育成の**ビジョン**や**目標・ゴール像**を**明確化**し全教員と**共有**する
- ☆ **既存の校内組織**を活用し、負担感を減らす→【図2】参照
- ☆ **PDCA サイクル**を意識した、それぞれの役割と進め方を決定する
- ☆ 「**トップダウン**」のみでなく、「**支援者**」として、実践に関わり続ける



【図2】OJTの校内組織例

三つの視点

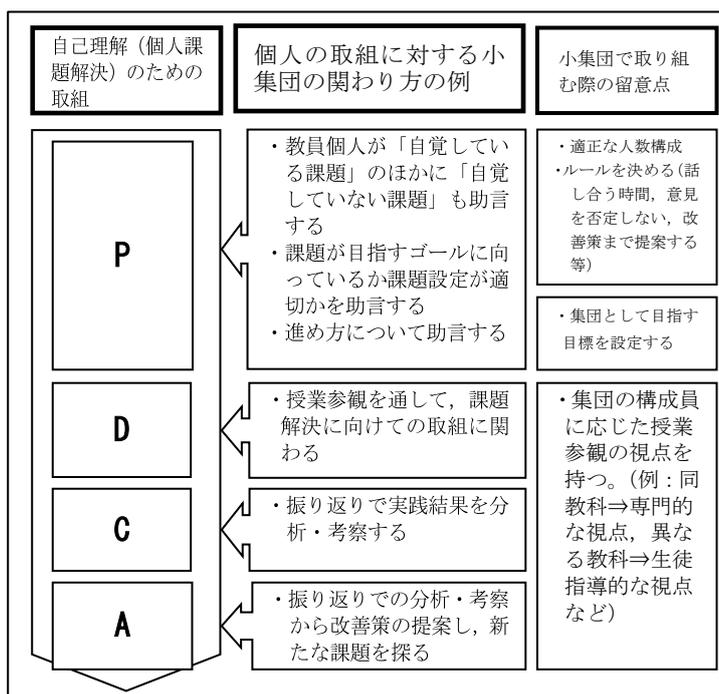
視点② 小集団を基盤とした取組

教員の力量の向上のためには、様々な機会や場面で他教員と多くの関わりをもつことです。そこで、小集団を基盤として、機動性をいかした取組を行うと効果的です。(詳細は、研究報告書 pp.7-8 参照)

小集団の特徴としては、時間や場所等の連絡調整が行いやすいこと、構成員同士の関わり合いが密になること、活発な意見交換がなされやすいことなどが挙げられます。この特徴を活かし、小集団が個人の取組に関わる必要があります。(【図3】参照)

《小集団の例》

- ☆ **教科に関わる小集団**
(例：同じ教科，異なる教科，同系統の教科など)
- ☆ **学校組織に関わる小集団**
(例：学年団，同じ校務分掌，部活動など)
- ☆ **同じ目的で意図的に結成される小集団**
(例：放課後勉強会，学校課題検討会など)
- ☆ **非公式な場としての小集団**
(例：休憩室内での集まり，印刷室内での集まり，飲み仲間など)



【図3】教員個人の取組と小集団の関わり方の例

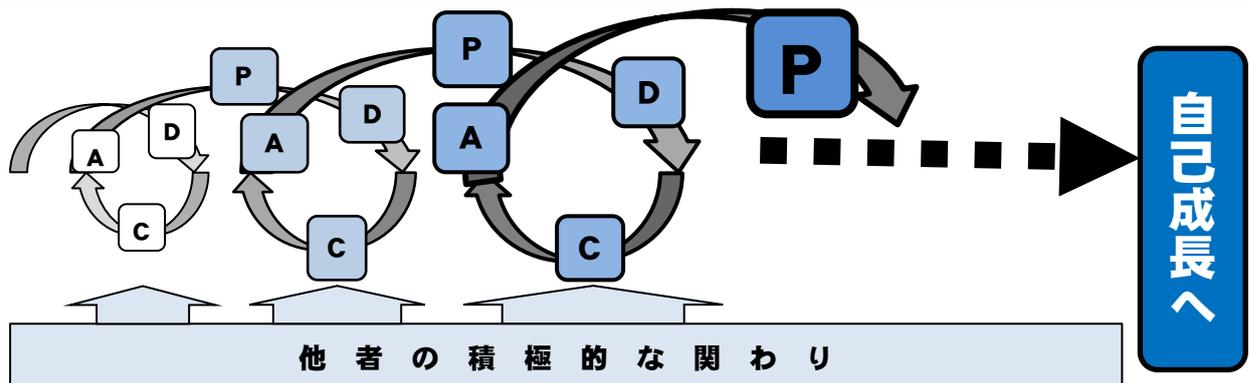
三つの視点

視点③ 自己理解を図ることを基盤とした取組

学校全体での教員の力量向上にも、教員一人一人の取組が基本です。各自が、授業力に関わる自分自身の現状と課題を自己理解し、自分に必要な取組の方向性を自覚することが大事です。効果的に進めるためには、アクション・リサーチが有効です。(詳細は研究報告書 pp.9-10 参照)

アクション・リサーチ 「現場教員が自己成長を目指して行う自分サイズの調査研究」

→PDCA サイクルをもとに実践と省察を繰り返し、自分の実態やニーズに合わせ改善策を考えていく方法



【図4】アクション・リサーチと他者の関わりイメージ

共同研究校等での実践内容

岩手県立遠野高等学校

特徴：視点①が充実した実践

- ・教員全体で「分かる授業」を目標として共有
- ・遠野高等学校版「授業力向上の観点」の設定
- ・組織・運営においてリーダーシップを発揮
- ・支援者型での様々な機会での関わり

岩手県立花北青雲高等学校

特徴：視点②が充実した実践

- ・1グループ4人の異教科による小集団
- ・小集団と個人の取組との深い関わり合い
- ・小集団内取組「振り返り」の標準化
- ・個人の改善策まで小集団メンバーで提案

岩手県立盛岡第二高等学校

視点②と視点③を融合した実践

- ・教育実習期間を活用した教員の実践の振り返り
- ・教員同士の対話による暗黙知の共有

おわりに

大都市圏では、教員の大量退職・大量採用がすでに現実の問題となっています。そして、ベテラン教員数が減少する中、日々多様化・複雑化する教育課題に向き合わなければいけない状態となっています。本県でもそんな先の話ではありません。しかし、各学校でOJTのシステムをつくり動かすことを「今」始めておけば、何も恐れることはありません。「ピンチはチャンス」です。この機会に、自身の授業を改めて見直し、同僚性を高めつつ、学校一丸となって意図的計画的に教員の力量を上げていきましょう。

高等学校 OJT 推進者のための 授業力向上ガイドブック



高等学校において、OJT の考え方をもとに授業力向上の取組を進めるためのガイドブックを作成しました。高等学校では、まずは「負担感を持たないように OJT の仕組みを整備すること」が大切と考え、配慮しています。

OJT
が分かる

すぐに
始められる

計画的に
できる



Point 1 既存の取組 を活用できます

OJT を新しい取組として捉え、通常の業務と切り離して考えると、忙しさや負担を感じてしまいます。そこで「既存の取組（互いの授業を見合う取組、研究授業、研究会など）をどのように活用するか」という観点で進めます。ガイドブックでは、4つのポイント（共有、振り返り、小集団活動、言語化）をもとに、既存の取組を活用する方法とその具体例を紹介しています。



Point 2 県内の高等学校の実践事例 を活用できます

岩手県内の高等学校における様々な実践事例を紹介しています。実践のスケジュールや時間配分、記入シートなども具体的に掲載しています。

- | | |
|---------------------------|----------------|
| (1) 管理職の積極的な支援による OJT | (岩手県立遠野高等学校) |
| (2) 小集団の機動性を生かした OJT | (岩手県立花北青雲高等学校) |
| (3) 教育実習生への指導を活用した OJT | (岩手県立盛岡第二高等学校) |
| (4) 定期考査期間中に OJT のきっかけづくり | (岩手県立盛岡第二高等学校) |

激動する社会を生きる子どもたち、先生方のために OJT を

これからの社会がどのように変化しても、教員にどのような知識や技能が求められるようになって、あらかじめ校内での学び合い教え合いのシステムを確立しておく、柔軟に対応できると考えられます。そこで、OJT の考え方に注目し、実践を重ねてみてはいかがでしょうか。



※ガイドブックは、岩手県立総合教育センターWeb ページ「教育研究データベース」からダウンロードできます → <http://www1.iwate-ed.jp/db/db1/index.html>